

同朋
選書
36

真宗門徒になる

袁輪秀邦

目次 ● 真宗門徒になる

仏道を歩む ― 真宗門徒の自立と連帯 ―

一 真宗門徒とは

キエルケゴールとの出会い／風土と信仰／祈りは人間の究極の姿
「真の人間になる」とは／つながること／人間らしさを回復する／
心を至し回向したまえり／往生とは信心が定まって助かること／
念仏申さんと思ひ立つ心の起こるとき／「門徒」と「檀家」はど

う違ふ？／真の仏弟子は金剛心の行人

二 信心がひらく世界

宗教は阿片？／柔軟心をもつ／自分の傲慢さに気づく／御同朋・御同行の世界を見出す／悪を転じて徳を成す／傍若無人な現代人よきひとのおおせをかぶりて／ひと言が一生を動かす／難しいことなんかなんにもなかった

47

三 自立と連帯―真宗門徒の生き方

答えは自分で見つけるもの／「本願がわかればそれでいい」／その人がそのまんま生かされる教え／病床の妻に教えられたこと／人は他のもののために身を捧げて生きていける／死は生命のバトントッチ／恩を知って徳を報ずる

90

仏意測り難し

信仰心とは何か／「不思議」ということ／いまここに在るとは問題を抱えること／阿弥陀如来とは悲しみのはたらきそのもの／悲しみとは相手のところに共鳴すること／自己への執着を破する法
仏法を生活のなかに実験する

127

あとがき

仏道を歩む

— 真宗門徒の自立と連帯 —

一 真宗門徒とは

キエルケゴールとの出会い

これから皆さんとごいっしょに親鸞聖人の教えを聞いてまいりたいと思います。つたないお話しかできないと思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。

私は若いころ、哲学を勉強しておりました。哲学というとヨーロッパの学問です。私はお寺に生まれた者ですが、お恥ずかしいことに、仏教というものになじめなくて、そこから逃れたいという思いで大学に入ったものですから、仏教を避けて哲学と

いうヨーロッパの学問を勉強しました。哲学がとくに好きだったというより、むしろ仏教というものを勉強する気になれなかったというのが正直な気持ちでした。そういう私がなぜいま仏教のお話をするのか、その機縁となった事柄をお話しすることから始めさせていただきます。

皆さんのなかには、若いころ真宗なんて知らなかった、お寺なんて嫌いだったという方もおられると思います。

私もお寺に生まれながらお寺が嫌いだった人間です。雰囲気的に古臭い、何かわけのわからないお経をあげて、門徒さんからお金をいただきながら生活しているという、そういう何か生産的でない生き方というものは、若い者にはたいへん否定的にとらえられるものです。

私もそういう雰囲気なかで育ちましたので、高校を卒業して京都に出まして、「さあ、寺を離れた。これからは自分の思うことをやりたい」ということで、小生意気にも、哲学を学びはじめたわけです。

ところが私が哲学を学びはじめたおかげで、奇しくもたくさんの素晴らしい先生方に出会うことになりました。最初に出会ったのが西谷啓治（にしだ けいじ）という先生です。この先生をおして、私は西洋の哲学者のキエルケゴールという人に出会いました。

キエルケゴールは、北欧のデンマークという国に生まれた方です。いまから百五十年ほど前に活躍した思想家で、「実存主義（じつぞんしぎ）」という哲学の先駆者（せんくしゃ）として名高い人です。そのキエルケゴールの思想を西谷啓治先生をおして学んだわけです。

キエルケゴールの思想を学んでいるうちに、ある一つのこと気づかされました。キエルケゴールはたいへん信仰深い父親の子として、デンマークに生まれた人です。その当時、デンマークには北欧流の非常に信仰深いキリスト教が広まっていました。

この宗派は、とくに人間の「罪の懺悔（ざんげ）」ということを重視し、罪の懺悔をおして神さまの思（おも）し召（め）しにかなうような信仰を得ることができると、この罪の懺悔のない者は神の思（おも）し召（め）しにかなわないんだと、ほんとうの信者となることはできないんだという教えをもっていました。

この「神の思（おも）し召（め）しにかなう信仰を得た者になる」ということはキリスト教ではとても大事なことでありまして、このような信仰を得た者をキリスト教ではとくに「フロック (flock)」と呼ぶようです。翻訳すると、「信者」という訳もありますが、信者というと一般には「ビリーバー (believer)」という英語の訳にあたります。つまり信ずることを英語では「ビリーブ (believe)」と言いますから、ビリーバーは文字どおり「信ずる者」、つまり信者ですね。

ところがフロックというのは、いろいろな意味がありますが、原語的には「チャイルド・オブ・ゴッド (a child of God)」、つまり「神の子」という意味だそうです。神の子になるということ、これが信仰をもつことだと、こういう意味があります。ですからキエルケゴールの父親は、自分の罪を懺悔することによって神の子になるということを生涯唯一の喜びと言いますか、願いと願望として生きていた人だったようです。

風土と信仰

このようにキエルケゴールの生まれ育った北欧のキリスト教信仰は、非常に深い真面目で敬虔な姿勢をもった信仰でした。

北欧は、日本の北陸とよく似ているようです。雨が多くて太陽の当たる日がない。皆さんのなかには太平洋側の地域から来られた方もたくさんおられるようですが、今日は雨が降っています。台風も来るらしくて、これが北上しますと、明日の朝ぐらいに北陸は台風の圏内に入つて、暴風雨になるようです。

日本海が荒れると、波が二十メートルくらいの高さになりますから、この会場の天井より三倍くらい高い波がグワンと唸るように押し寄せてくる。そういうときに日本海を見ると、日本海つてすごいなと思います。

親鸞聖人もその日本海の波に揺られながら越後国（現在の新潟県）まで流罪にな

つていかれたわけですね。おそらく親鸞聖人はそのときはじめて、轟々とすさまじい音を立てて荒れ狂う海というものを見られたのでしよう。

ですから、これは皆さんお気づきだと思つたのですが、親鸞聖人のお書物を見ると「海」という文字がたくさん出てきますね。たとえば、難度海・煩惱海・生死海・愚癡海・無明海・一切群生海などです。これらはみな人間の煩惱の激しさや深さ、また生きることの曖昧さや愚かさというものを、荒れ狂う海にたとえておられるのでしよう。

けれどもその一方で、その荒れ狂う人間の在り方をしずめて、人間が真実に目覚めるために建立された仏さまの本願の世界、お浄土の世界も海にたとえていらつしやいます。たとえば、本願真実海・本願一乗海・慈悲海・誓願海・彼岸海、大信心海などです。海は荒れ狂うものとしてだけでなく、いったんその荒れがおさまると、ほんとうに静かで、穏やかで、優しい表情にもどりますね。

そのような海の二面性と言うか、同じ海でありながら二つの在り方を同時に包むは

たらきをするというところに、親鸞聖人は仏さまの教えのはたらきの見事さ、素晴らしさを感じとられたのではないかと思うのです。

ともあれ、親鸞聖人は日本海を眺めながら仏さまと対話され、信仰を求めていかれた人だということができのではないかと私は思うのです。

それに比べて、キエルケゴール家の故郷であるデンマークのユトランド半島のセディングという寒村は、海ではなく、葦や雑草が生い茂った広漠たる未開墾の原野が延々と続く地方です。そして「白夜」です。北極に近い地方では、太陽が日の出や日没の際、地平線とほぼ平行に動くため、一晩中薄明るい日が多い。それを「白夜」と言いますが、デンマークやノルウェーあたりでは、そんな白夜の日が多く見られます。真夜中になっても明るいですね。この北陸の夜明けのような感じですかね。そして、太陽が南のほうへ下がると、雨や雪が降り続く厳しい冬がやってくる。

そのような風土は、この北陸と何か共通したものがあるような気がするのです。つまり、厳しい環境のなかでは、自分をじっと見つめて生きていくという型の人間が育っていくのではないかと思うのです。

祈りは人間の究極の姿

とくにキエルケゴールの父親には、そういう性格が強くあったようで、いつも自分は罪人であるという意識があつて、「神さまどうか許してください。こういう私もあなたの子になれるでしょうか。どうか神の子としての信仰を与えてください」と、神に祈りをささげていました。

キエルケゴールは、この父について三十三歳のときの日記に次のように書いています。「彼（父）は幼い少年であったころ、ユラン（ユトランド地方）のヒース（背の低い樹木の名）の野で羊の番をしていた時、苦しさにあえぎ、飢えに疲れ果てて、丘の上に立って神を呪った。そしてこの人は八十二歳になっても、それを忘れることができなかった」と。